

# 『雪山小舟（ゆきやまこぶね）』プロジェクト ものづくりパートナー様との共創構想

## 1. 私どもの自己紹介：プロジェクト「雪山小舟」とは

「雪山小舟（ゆきやまこぶね）」は、数億円かかるリフトの老朽化や暖冬に苦しむ全国のローカルスキー場を救うため、「リフトに依存しないアセットライトな雪上モビリティ（クローラー車+特製客車）」でゲレンデ再生を目指す『雪上モビリティ開発プロジェクト』でございます。

### 【雪山小舟（ゆきやまこぶね）の具体像】

4WD車両（ハイラックス等）を雪上クローラー化し、安全なアウターロールケージ・防音断熱パネル・低位置マウントを備えた特製客車（キャビン）を牽引。山麓から山頂へお客様を安全かつワクワクする体験として送り届ける新しい乗り物です。

この度、本キャビンの設計・製作にあたり、日本が誇る高い金属加工・製缶・特装技術をお持ちのものづくり企業の皆様と「二人三脚で一緒に創り上げていきたい」と考え、ご挨拶と共創のご相談をさせていただきます。

## 2. どういう思い（発起人の原体験とプロジェクトの原点）

私自身、ひとりのサンデースノーボーダーとして雪山を愛してまいりました。かつて自分の子供を初めて連れて行った思い出深いローカルゲレンデがあったのですが、そこも「リフトの老朽化」という壁を越えられず、閉鎖されてしまいました。同じように、全国のローカルゲレンデが次々と姿を消していくのを目の当たりにし、「大切な場所を失う悔しさ」がずっと心に残っていたのです。

現在の地方ゲレンデは、「莫大なリフト維持費で廃業するか」「巨額の負債を背負うか」という絶望的な二択に追い込まれています。エンジニアとして、ITとモビリティを掛け合わせることで、彼らに「第三の選択肢」を作りたい——それが本プロジェクトの原点です。

### 【日本の雪山文化と子供たちの思い出の場所を次世代に残す】

莫大な固定インフラではなく、4WD車で安全な客車（キャビン）を引っ張るアセットライトな仕組みで地方ゲレンデの存続を支え、日本の雪山文化を次世代へ繋いでいきたいと考えております。



▲ パートナー企業様と一緒に実現を目指したい「雪上牽引車×特製客車キャビン」のイメージ

### 3. なぜ「実現性が高い」構想なのか（空想・絵に描いた餅で終わらせない理由）

単なるアイデアや学術的な試案で終わらず、「まずはPoC（実証実験）から低リスクにスタートする現実的なアプローチ」を前提として準備を行っております。

#### ① 明確なニーズとPoC（実証実験）提案

スキー場側にとってもいきなり全面移行するのは心理的・資金的ハードルが高いため、まずは1シーズン限定の「PoC（実証実験・限定運行）」から低リスクに提案するスキームを想定しております。

#### ② 国の補助金制度（2/3補助枠）の活用見込み

観光庁や環境省の「観光地再生・実証運行パッケージ」等、公的補助金制度（補助率2/3）をPoC予算として適用することを想定し、スキー場様が負担を抑えて導入しやすい環境を準備しております。

#### 【想定しているご提案ターゲットの類型】

抽象的な机上の論理ではなく、具体的に以下のような課題と地理的特徴を持つゲレンデ様をモデルケースとして設定し、ルート適合性や収支のシミュレーションを行っております：

- ・中部・信越エリアの自治体所有ゲレンデ型（雪質は最高だが山頂への長大リフト維持費が重く、管理用道路を活用したアセットライト送迎モデル）
- ・西日本・ローカルエリアの第三セクターゲレンデ型（地域唯一の観光資源として存続が期待されるが、リフト老朽化により低固定費化が急務なモデル）
- ・ファミリー・初心者向け公設ゲレンデ型（暖冬で営業日数が不安定な中、体験型エコツアーとして低固定費で再生を目指すゲレンデモデル）

### 4. 「一緒に創り、一緒に進める」パートナーシップのお願い

私どもが一方向的に図面や仕様を指示して発注するような従来の関係ではなく、企画の初期段階から一緒に知恵を出し合い、当事者として二人三脚で進めていくプロジェクトにしたいと考えております。

### ① 仕様や構造を「一緒に考える」

「この曲げ加工ならコストが抑えられる」「このフレーム構造なら強度が出る」といったモノづくり現場ならではのアイデアをぜひ教えていただきたく存じます。

### ② スキー場様へのご提案も「共に進める」

今後、全国のローカルゲレンデ様や事業者様へご提案や意見交換を行っていく際も、製造パートナー様の技術的な裏付けがある信頼性の高いプロジェクトとして共に歩んでいければ幸いです。

#### 【私どものスタンス：モノづくりの主役は技術パートナーの皆様】

私どもは雪山の課題意識と初期アイデアを持つだけであり、専門的なモノづくりにおいては技術者の皆様が主役でございます。二人三脚でのご参画を心よりお待ちしております。

## 5. 今後の進め方（PoC実証実験の受注を起点としたロードマップ）

自費で事前に実験用モデルを作るのではなく、スキー場様からの「PoC（実証実験）導入の決定・予算化（補助金含む）」の受注を起点とし、その予算で『本番仕様にほぼ近い実証1号機（先行量産機）』を国内のパートナー企業様で製造するスキームを想定しております。

このPoC案件で製造する1号機が、スキー場での実証運用を果たすと同時に、将来の本格展開・横展開に向けた「製造基準・治具・ノウハウ」のベースとなります。受注成立時にスムーズに設計・見積もり・製缶へ移行できるよう、事前にパートナーの皆様と技術対話を進めさせていただきますと幸いです。

- Step 1：本構想のご説明と、お気軽な技術意見交換（本資料）
- Step 2：詳細な技術仕様イメージ（別冊・技術仕様書）のご共有と構造・概算見積もりの事前すり合わせ
- Step 3：スキー場様へPoC（実証実験）のご提案・予算獲得（補助金適用）
- Step 4：PoC受注確定後、パートナー企業様にて『本番仕様にほぼ近い実証1号機』の製缶・組み立て・現地実証運用
- Step 5：PoCの成果と実績をもとにした、本格導入および全国の他ゲレンデへの横展開